

## まえがき

台湾に来る観光・ビジネス客の憩いの場は、一昔前までは、男性天国、新北投温泉での酒家（生バンド演奏と円卓での美女を隣にはべらせての大宴会が出来る置屋と遊郭の一体した室内盛り場）であったが、昭和の終わり前後に赤線廃止、酒家の衰退で、逆に、家族連れ温泉街に変貌して来た。それと同時に台湾国民の所得水準も上昇の一途をたどり二〇〇七年には国民総生産（GNP）が一五六五〇〇ドルと日本の二万五〇〇〇ドルに近づき、先進国の仲間入り、然も、台北と東京での物価の比較では台北は東京の三分の一から四分の一であり、エンゲル係数（国民可分所得 $\parallel$ 余暇に回せるお金の比率）では、東京で暮らす人々よりも豊かになっている。

同時に日本から来られる観光客も定年退職後の夫婦連れや独身女性が増えてきて、更に、最初の台湾旅行が外国に行ったという違和感よりも、自分が育った土地の一昔前の雰囲気が漂うかのような街にほっとした安らぎを感じて、もう一度、そして、又、もう一度訪ねてみたい、できればここに住み着いてみたいと言った気持ちこそその街になってしまった。その台湾の魅力に取りつかれた人々にとって、何故台湾がいいのか、その裏事情を知りたい、単に中華料理のオンパレードの賞味だけでなくて、文化のお土産も持って帰ってもらいたいと言う気持ちから、著者の私はここにこの本を書き始めた。

過去に「遂に出た！台湾行く人・来る人必読」山崎 峰で駐在員を対象に発行した本が増版の又、又、そして、又を重ね、最終五万冊まで台湾・台北で売り尽くした経験がある。それも、一般に本は一人一冊買ってもらえれば御の字だが、一人が二〇冊、三〇冊と購入してくれた。しかも、会社によっては三〇〇冊、四〇〇冊とまとめ買いもしてくれた。それは、台湾の常識と日本の常識が余りに違い過ぎて、その違いを駐在員が日本の本社のスタッフに説明すると「お前は台湾ボケしたのか」と侮蔑とからかいの言葉で返ってくる悔しさから、お前のほうが「日本国内ボケしているんだ

よ！」と言いつ返す目的で購入してくれた。それほど、日本・台湾文化差異の距離が大きいこの国の原動力を、駐在員達だけでなく、台湾観光客の人々にも知ってもらいたいと言う願望から筆者・峰崎山は本書を文化のお土産として観光・ビジネス来台湾各位に持帰って台湾観光・出張の土産としてもらいたくここに出版いたすものである。

今日から明日以降にかけての私の目標は、日・台文化差異研究所（又は会）を設立し、台湾から日本を眺め日本の硬直した社会構造の改革にアドバイスが出来る機関を立ち上げたい次第である。

終わりに著者の経歴と言えば、二十歳後半に労働集約産業の最たる縫製業の工場管理責任者として台湾中部の台中に赴任してから、その後、会社の人事異動で辞令が下った中国大陸転勤を断り、これを退職の起点としてずっと台湾に留まり、今年で三十四年を台湾の気候、風土、人物にほれ込み自由自在の発想での生活を楽しんでゐる。

平成二〇年の今日、日本企業では新しい発想の出来る人材として地頭の思考の人材が求められているが、一番手っ取り早いこの手の人材を育てるには、育った環境をベースに海外に数年でもいいから十代、二十代の年齢の人材を遊学させることである。私の家族は長男、八歳下の長女、そして、元氣一杯の妻との四人家族ですが、又、多国籍、多言語家族である。

家族のコミュニケーションはと言うと、私と妻は日本語と北京語と英語（カナ区切り文字のカナ英語Ⅱ笑）だ。長男、長女は日本語、北京語、台湾語、英語が母国語で国籍も日本籍をベースに私と妻はマルチ国籍、長男と長女はアメリカ国籍を含めてトリプル国籍の家族だ。平成二〇年には国民年金も受給しだした。台湾での年金も合せ、物価が日本の三分の一から四分の一のこの国では少しは楽な生活が楽しめる。趣味は合気道師範（台北アメリカンスクール）、パラグライダー（飛行傘）教練、各種協会の理事、そして、年に一、二度の小説、随筆の出版と併せて、自分の人生のストレス解消が本音で人生を楽しんでおります。

## 目次

まえがき	1
第一章 観光編	11
来台湾外国人の数	13
地理と気候	15
民族構成	15
その一 台湾の歴史は	15
その二 日本人在住の漢学者黄文雄先生の研究によれば	17
言語	18
一 台湾人の人生観	19
二 本省人と外省人とはなにか（台湾人のルーツ）	20
三 台湾人の親日感情の裏事情	26
四 高速道路の料金体制	27
五 台風シーズンの警戒警報	30
六 冠婚葬祭儀式	32

七	スクーター・オートバイの多い裏事情	34
八	駐車場戦争	37
九	住宅にはバス、トイレが二つある	39
十	外人お手伝いさん	40
十一	台湾の宗教　そして　道教廟へ入る時の大切な規則	43
十二	屋根の上のステンレスタンクの謎	45
十三	台湾のガソリンスタンド事情	46
十四	台湾人の所得事情	48
十五の一	台湾における日本人学校裏事情	50
十五の二	台湾人を旦那にもつ日本人妻の悩み	53
十六	故宮博物院裏事情	55
十七	円山飯店・忠烈祠の裏事情	59
十八	日本語の四倍も早い中国語の伝達力	63
十九	日本人先掘者が残した足跡	67
	鄭成功(日中混血児)この時代から台湾は中国大陸からの支配が始まった。	68
	八田与一(嘉南平野灌漑事業)	72
	磯永吉	74

	西郷菊次郎（西郷隆盛の落とし子）	75
	明石元二郎	76
	後藤新平（台湾総督府民政長官）	80
二十	日本植民地時代の大事件	82
	牡丹社事件と沖繩返還	82
	霧社事件	83
	三板橋墓地と台中宝覺寺 高砂義勇隊	84
二十一	靖国神社と中国政府の抗議の裏事情	88
二十二	ごみ収集事情	94
二十三	はと外交と台湾旦那の浮気公認の裏事情	95
二十四	消費税と町の活性化アイデア（統一発票Ⅱ国税局発行の公給領収書）	97
二十五	日本人のクレームと台湾人ガイドの受け止め方の文化の違い （台湾ガイド泣かせの日本人観光客が発信する典型的なクレーム）	100
	観光客に伝えたい台湾旅行業界の常識	110
二十六	蒋介石総統に対する日本の恩と台湾に対する台湾人の感情の二面性	115
二十七	二二八事件とは？	118
	国民党政権下（馬英九総統）の台湾はどうなるか？	118

第二章 生活編……………121

一	「交通事故と交通法規の考え方」……………	123
二	台湾小商人の接客態度（屋台＝路辺攤）……………	126
三	「アパート生活は気楽で楽しい。夜中にカラオケバンバン騒音は次に自分の番まで我慢」……………	130
四	「葬式は一生に一度だから道路占領でもいいじゃないの」……………	133
五	「台湾人から見た海外留学先国別ランクでは日本は下位」……………	136
六	「車の保険の有効的なつかい方」……………	140
七	「台湾人の割り勘と日本人の割り勘の違い」……………	142
八	「台湾の運転技術は世界一」……………	144
九	（運転免許受講基準は日本とほぼ同じだが費用は日本の一〇分の一）……………	149
十	「食堂の繁栄は厨房のコックの腕で決る」……………	153
十一	「神様、仏様へのお祈りの時間は無制限」……………	155
十二	「日本語塾と英語塾との損得勘定」……………	157
十三	「台湾に来る外人労働者の裏事情」……………	159
	「台湾社会は農暦で動いている」……………	

十四	「道路のあるところ、必ず、商店あり」（日本の衰退する街の復興に参考となる）	162
十五	「こんなに世界一の商品を持っている国」	166
十六	「台湾社会は鍵の社会」	170
十七	「日本人のポランテアはなぜ長続きしないか」	171
十八	「絶対、旦那にごめんなさいと言わない台湾の奥さん」	176
十九	「中国人は単一民族だと思っている日本人」	
	なぜ中国人は反日思想がなくなるのかを理解できない日本人	
	日中戦争など反日の言いがかりの一片に過ぎない	180
二十	「中国人の遵法精神は唐の時代の法三法の思想」	184
二十一	「日常生活でも日本人と中国人ではこんなに違う」	188
二十二	「台湾で成功できる日本人とできない日本人の違い」	193
二十三	台湾で生活したいと思った時の注意事項	198
二十四	台北大都市の交通問題	200

第二章 会社編……………203

一	「会社への忠誠心の違い」……………	205
二	「ホウレンソウ（報告・連絡・相談）の無い世界」……………	209
三	「給料袋は受け取ったその場で開いて仲間と比較」……………	212
四	「安易に東南アジア海外投資に駆け出す日本の中小企業経営者」……………	215
五	「何が辛いつて時間を自由に設定できない事程辛い事はない」……………	219
六	「こんなにも違う台湾の商売習慣」……………	223
七	「社員を雇うなら日本人に限る」……………	225
八	「肉体疲労は昼寝をしないから」……………	229
九	「高級車 ベンツ、BMW、レクサス、ジャガーは若者程簡単に手に入れる」……………	233
十	「パテント模倣の鬼ごっこ」……………	238
十一	「会社の信用とは何」……………	242
十二	「貿易逆差解消の対応の早さでは一級の早業の台湾」……………	248
十三	「二分の商品には一分の価値」……………	251
十四	「中国人の狙っている市場はどこか」……………	257
十五	「金儲けと先端技術は別のもの、台湾人の錬金術」……………	259



十六	華僑とはなにか(日本の国際外交の弱点の原因はここにある)	263
十七	台湾企業戦士の家庭の苦悩	266

第四章 投稿コラム……………269

一	国民性による人生の目標の違い	271
二	(信仰する神様によって生き方がこんなに違う！)	276
三	台湾の民意代表は利権代表(権力あるところ金あり)	278
四	台湾人Ⅱ有情有義、香港人Ⅱ無情無義、大陸人Ⅱ拒情拒義	279
五	台湾のワンちゃん	282
六	老後は中国暮らし(物価の差を利用した年金暮らしはどうでしょう?)	283
七	気楽に出席できる台湾の結婚式	284
八	現地で中国料理を楽しむために知っておきたいマナー	286
九	あんたは台湾人になったんだね!	287
十	台湾人の憂鬱	289
十一	龍山寺の小話	290
	故宮博物院の小話	290



第一章  
觀光編



## 来台湾外国人の数（二〇〇七年統計）

先ずはじめに皆様に毎年どれだけの日本人が台湾に商務、観光、その他で来るかであるが人口が二三〇〇万人、日本の人口は一億二七〇〇万人と約日本の六分の一の人口の国、九州より一割小さい面積である国に来る外国人の総数は、二〇〇七年の統計では、三七二万人。その中で、日本から台湾に来た人数は一一七万人と全来台外国人の三分の一を占めている。逆に台湾から日本に向かった客の数はというと、これも一三八万人を突破している。人口比で言うと、日本の六分の一なので六倍すると約八〇〇万人近くの人が日本を訪問したことに相当する。この数字は二〇〇五年度で日本に来る外国人がやっと八〇〇万人を突破した比率と比較すると驚異的な数字である。

何が驚異的かというと、台湾人の海外への出国者数は二〇〇七年で九〇〇万人、一方日本の数字はこれに対し一七三〇万人。即ち人口比で考えると、台湾人口二三〇〇万人、日本人人口一億二七〇〇万人。日本の人口は台湾の約五・五倍であるからこの比率で考えると、日本人の実に五三〇〇万人が海外に出たことに相当するという驚異的な数字なのである。

台湾は国土面積で言うと九州より一割小さい三・六万平方キロメートル、四国より少し大きい島国だが、然し、この国民には島国根性と言った定義が当てはまらないくらい物事の考え方が行動的、改革的と言おうか前向きである。法律よりも現実を重視し、法律を改正してしまう捨て身の改革パワーを持っている。

それに、天性からの明るさがある。台湾人と日本人の表情を比べてみると、台湾人は天性か

らの楽天的、日本人は悲観的である。いつも心配の種が無いとそれが心配と言わなければかりの顔をしている人が多い。同じ島国人種でありながら台湾人と日本人はこうも違うのである。

したがって、狭い国土に引きこもることなくどんどん海外へ飛び出す結果がこの数字になっているのである。

その一例が台湾総督第四代就任の児玉源太郎（日露戦争時の陸軍将軍、同時代には山県有朋、大山巖、乃木希典）が招聘した後藤新平がいる。後藤は、東京都の今の道幅を作った人であるが、当時では、道路幅が広すぎると大反対があつたとのことである。それが、今では、道路幅が狭すぎる状況である。この後藤新平が台北の今の都市計画、下水道を日本国内よりも早く作つた。この様に島国根性とは、如何に多くの国外からの知識を吸収することが出来るか、出来ないかが大きな違いとなってくる。その面から言えば、先に述べた様に二〇〇七年において、日本は漸く一億二七〇〇万人人口の一四％の一七三〇万人が海外に出かけたのに比べて、台湾人は年間九〇〇万人近い人数、人口の約三七％が毎年商務、観光、その他の事情を含めて海外に出かけている。その分、自国との違いを肌で感じてくる。大企業においては従業員の五分の一近くが博士号を持っている。国会議員においては、大部分が博士号を持っているといわれているほどの高学歴の国民である。

## 地理と気候

台湾は北緯二五度一〇分東経一二一度三〇分の位置にあり北極から南極までの線で日本と比較するとより中国福建省沿岸に寄っている。

そして、芋の形をした島は台湾南部を真横に走る北回歸線でその北側が亜熱帯、その南側が熱帯と二分できる。それだけでなく、さらに、北から南に縦割りに二分する標高四〇〇〇メートル近い中央山脈が東西に台湾を二分しており、その標高差で一年中寒帯、温帯といった区分まで加わった世界でも珍しい動植物、地殻をもった島である。

道路走行距離では全周約一二〇〇キロで面積が三・五万平方キロの小さな島の中で、一日の天候に四季がある。首都の台北が雨でも日本から飛行機で舞い降りた桃園国際空港は、燦々と太陽が降りそそぐ真夏の天候でそれより更に南に八〇キロほど下ると雷雨の真つ最中という具合に一年の天候が一日の天気凝縮された島なのである。

## 民族構成では？

### その一

台湾の歴史は明朝時代の末（一六〇〇年代）に中国・福建省沿岸から海難事故で漂流して来た漁民が今の台南近くの北港の海岸にたどり着いた時から始まる。

その後、一六六四年以降明王朝（漢民族）が清王朝（満州族）に支配される時代に続々と移民が始まった。

民族の歴史で言うと、マレーシア、インドネシア系の五〇〇年以上前から住み着いている原住民（一二種族で言語がそれぞれ違う）、一六〇〇年代に今の台北地区を占拠していたスペイン人（紅毛城）、台南を占拠していたオランダ人（赤嵌楼）、この二国の西欧人を駆逐した中国大陸の鄭成功（父親は鄭芝竜で母親は長崎の田川家の御典医者Ⅱ殿様に仕える医者Ⅱの娘との間に生まれた日中の混血児）により支配、その後一八九五年の下関条約で清朝政府が台湾を日本に割譲までの二五〇年前後、満州族の清王朝による支配、続いて、日清戦争に勝った日本が李鴻章との間で取り交わした下関条約で割譲を受けて、日本が近代国際社会で初めて手にした植民地としての五〇年、一九四五年（昭和二〇年八月一日）、日本は連合国に対してポツダム宣言Ⅱ無条件降伏で台湾の主権を放棄、現在の国民党政府（中国本土派による、軍事力、警察力による台湾人民への支配）蔣介石総統が進駐してきて台湾を接収した。

台湾人から見ると、日本は台湾の領有権を放棄したのであって、返還したのではないと言うことが、今の台湾住民の国際法上の法律根拠として独立主張の一つとなっている。その背景には、台湾の主権問題として、四〇〇年前から福建省沿岸地区を中心として、台湾に移民して来た人びとにとって、自分達を支配していた政権は、明朝政府、清朝政府からも具体的に実効支配された事は無い。ただ、日本政府に五〇年間支配されたが、その後の国民党政府からも実効支配をされたことがないと言うことで、台湾人民の自治権確立を世界に向けて呼びかける法的根拠としている。



更に、中国国民党政府以外にも、中華人民共和国（中共）からも一度も実効支配された事実が無いことも台湾人民の独立主張の根拠としている。

## その二

日本在住の漢学者黄文雄先生の研究によれば、一六六一年鄭成功が台湾に来る前に台湾にいた漢人は、約一万五〇〇〇人、鄭成功は約三万人の軍隊を引き連れて来たが、鄭氏一族三代で台湾の南部を中心として統治した期間はわずか二三年間、一六八三年清朝が大軍を差し向けて鄭氏一族を滅ぼした後、清朝政府はあらゆる強硬手段を講じて漢人を中国大陸に帰らせたので、残った漢人はわずか二万余人だったろう。そして、当時台湾の原住民のうち、平地に住む割合文明の開けた平埔族（熟蕃）の人口は約二〇万人いた。

そして、一六八四年台湾が正式に清朝政府の統治下になって以来清朝政府は海禁（鎖国）政策をとること一九一年の長きに亘った。一八七一年（明治四年・牡丹社事件で日本の宮古島島民が沖縄からの帰りに難波してたどり着いた時にその島民の多くが虐殺された事件）になって、やっと解禁された。その二〇年後の日清戦争の賠償として清国より割譲をうけ、一八九五年には日本の領土になった。要するに、当時の台湾海峡は俗名を「黒水溝」（黒水の溝、即ち波の荒い意味）と呼ばれ、又、海禁期間の渡航は「密航者」になるので、とても、女子同伴での渡航は無理であった。結局、渡航者は「羅漢脚（裸一貫の男）」、現代語で言う「裸一貫」、単身赴任であった。それ故に「有唐山公、無唐山媽」という言葉が残っている。「唐山」というのは漢民族の故郷を表し、「公」は爺さん、媽は婆さんの意味で、全体の意味は、唐山から来た男はいるが、

唐山から来た女はいないという意味である。

結局、男は平埔族の娘を娶って伴侶とし、子孫を増やしたのである。故に、台湾人の漢民族の血統はわずか一七%で残り八三%は平埔族、或いは、少数の混血系統である。それ故に「私は台湾人であり、同時に中国人である」というのは間違いである。

(新亜ミニニユース…二〇〇六/五/一より)

## 言語

現在の共通言語は、北京語(国語と称している)である。然し住民の七五%は福建省の一方の言語である閩南語(一般に台湾語)を、一五%が客家語(中国の黄河流域から北方民族||騎馬民族に追われ追われ移民して来た少数民族||代表的な人物では鄧小平氏や李登輝氏)を使っている。そして、一九五〇年前後、中国共産党と国民党政府軍との内戦に敗れて一挙に台湾に政治亡命してきた当時約二〇〇万人の人々の共通語として広められ、その後は、台湾の公用語として政府が定めた国語(北京語をベースとした言語)がある。

更に、ここ数十年は、低所得者の結婚相手の女性が台湾国内では見つからないという深刻な問題解決の一手で、東南アジアのマレーシア、インドネシア、タイ国などから、特に、戦前には越南フランスと呼ばれたベトナムからの写真見合いによる花嫁が沢山流入してきて、まさに、多民族国家を形成している。

以上の背景をもとに、観光、ビジネスで來台される読者の皆様に台湾で目にする疑問点の裏事情を解説して、より味わいの深い台湾を楽しんでもらいたく、この本を発行する次第である。

## 一 台湾人の人生観

台湾はすばり一言でお金の世界である。前看と銭看の発音も（チエン・カン）である。

一番端的な例は何処の国にとっても晚八時のテレビのゴールデンアワーでどんな番組が一番人気かを見れば分かる。

日本では、サラリーマン勤めをベースにした恋愛物が中心であるが、台湾では、親の財産をめぐる家族のごたごた問題が多い。ある一面では、台湾も日本と同じく少子化の傾向に拍車がかかっている。しかも、その子供に対して親が幾ら財産を残してあげられるか。特に、伝統的に台湾は男の子が母親にとってすべてである。どんなに親不孝の息子でも、親孝行の娘より母親は息子を大切にす。「なぜ？」と息子の母親に聞いても、理屈ではなく、感情で男の子を大切にす。それは、台湾では子供に出来るだけ多くの財産を譲ることが親の役目としての感覚が強く、子供は子供でまた親からの財産をあからさまに期待しているのである。そしてどういふ訳か母親は男の子に特別な感情があるようである。

それと、男の子が複数あると、結婚した男の子のかみさんも加わって親の財産争いが始まる。テレビドラマもこの家庭争議が中心である。それも、財産は幾らあっても取り合いを演じる。

台湾・中国には「どんな財閥でも親子三代で無に帰す」といわれているがまさにその通りである。なぜ金がすべてかと言うと中国四千年の歴史は動乱の連続であった。政権が交代すると戦乱で兵隊にとられた男子は戦死、行方不明、農作物の担い手が数年もいなくなる世界では、次に来る乱世は飢えである。時の政権は人民の面倒は見てくれない。台湾においても一六〇〇年代から今日まで統治してきた政権はオランダ、スペイン、満州族、日本人、中国から共産党に追われて来た大陸政権（中華民国政府≡外省人）といずれの政権も台湾人にとって搾取を目的とした政権であった。結局頼りになるのは、身内と金銀と現金となるのである。法律も遵守するほどに統治者に利益があり、従う方は損をする歴史でもあった。その為一旦政変が起こると身の安全の為に国外移住する。その伏線としての金銀とお金であり、アメリカ、カナダ、ニュージーランド等に身内を移民させている。

## 二 本省人と外省人とは何か

### 台湾における民族気質と日本人気質

長年台湾で生活しているお陰で多少は民族気質と言うか、国民気質というか、そういうものが第六感で「ピン」と来て十中八九当たる様になってきた。

顔たちと立ち居振る舞いを見ただけでこの人は外省人だ、台湾人だ、客家人だと言った判断が出来る様になってきた。そうすると相手との付き合い方法もおのずと違って来る。